



88号

2017.12.13



青森県高P連調査広報委員会

題字：八戸高等学校 諏訪内博彦

青森県高等学校PTA連合会事務局

〒030-0113 青森市第二問屋町4丁目11-6 計量検定グループ庁舎内

TEL 017-757-8586 FAX 017-757-8587

E-mail: akp017si@galaxy.ocn.ne.jp

http://www.aomori-koupren.com/



青森県高P連 合同研修会

「高校生の子どもとの接し方」

平成29年度研修委員会、健全育成委員会合同研修会は9月26日、青森県総合社会教育センターで開催されました。今回は講師に明治大学文学部教授で教育学博士、心理学スペシャリストの諸富祥彦（もろとみ よしひこ）氏をお迎えし、「高校生の子どもとの接し方」～子供の意欲を育てるために～をテーマに実施いたしました。会場には約200名の保護者の皆さんが参加し、傾きと爆笑の渦に包まれ大盛会の研修でした。

「近くの方と4人グループを作り、手を繋いで」「その4人で、ユニークな踊りを考え発表しましょう」諸富先生の穏やかな声が響きスタートです。参加者はどんな諸富ワールドに引き込まれます。すっかり身も心もリラックスできた私達におっしゃった言葉は、「子育ては成るようにしかないんじゃないんです。親がベストを尽くしても思うようにはいかないものなんです。運なのですよ」という予想もしないお言葉でした。沢山の子育て情報が氾濫している世の中にあつて、日頃、子どもとどう向き合ったらいいのか悩むなかで、シンプルな内容にとっても気持ちが楽になった瞬間でした。そして、諸富先生ご自身の体験に基づき、思春期の子供の心は悩み葛藤している時期で、たとえるならスライム状態だということ、だから、この時期一番大切なのは、どんな時もどつしりと構え、子供を信頼し、あせらず見守る親の態度だと熱く語りかけて下さいました。

次に、信頼関係を築く為に親が

してはいけないことを、ジェスチャーとユーモアを交えて下さいました。以下

（高校生、思春期の高校生にしてはいけない5か条）

①反抗期の子供と同じレベルにならない、売り言葉に買い言葉を避ける。（対処法）親が感情的になりそうになったら場所を変え、時間を置く。

（例）一人カラオケ、トイレにこもる、紙をやぶく、アロマを使う、ロングブレスを意識して深呼吸をする。

②子供のスマホ・パソコンを見ない、取り上げない。

③兄弟姉妹を比較しない。

④否定的なことを言わない。

（例）どうせ無理でしょ。できないでしょ。お前は馬鹿だは禁句。出来るよね、お願いね、ありがとうを言う。

⑤質問攻めをしてはいけない、無視をしない、親の意見を押し付けない。

締めくくりに、子供の話に興味を持って傾聴し、大人の本音や社会の本音を話す姿を見せること、なによりも家庭でまずは親が、ス

マイル＆ハッピーで過ごす事が思春期を乗り越える術だと教えて下さいました。

いつかは子供たちも社会に飛び立ちます。沢山の知識を身につけ、その知識で何ができるか、どう生きてゆくのか、自立と自律を育んで行くのが思春期なのではないでしょうか。この大切な社会の橋渡しの時期を見逃さず、動じない態度でサポートして行く役割が親なのだ学びました。講師の諸富先生、そして参加された皆様、関係者各位に心より感謝申し上げます。とても貴重な経験をありがとうございました。

（健全育成委員長 中野 真弓）



講演する諸富祥彦氏

青森県高P連進路指導研修会

平成29年度

地域産業と学校の連携推進フォーラム

今年度の進路指導研修会は、県教育委員会とタイアップして実施されました。フォーラムに先だって、高校生のインターンシップを積極的に受け入れて下さっている県内企業15社が県教育長より表彰を受けました。また、会場前のホールでは各企業が行っているインターンシップの内容をPRするパネルも設置され、来場者と交流できるような試みがなされておりました。

研修会では「地元を支える人材を育てる」インターンシップの活用術」と題して、NPO法人アस्कネット創業者・顧問である毛受（めんじょう）芳高氏による講演が行われました。イン



講演する毛受芳高氏

ターンシップのプログラムは「実習型」「就職準備型」「進路探索型」など生徒の状況によって様々な形式をとっていること、特に普通科・進学校の生徒にとっては「課題解決型」が有効であると話されました。明確な目標が見いだせないまま「とりあえず大学」という指導は生徒にとって決して有益ではなく、将来の自分像をイメージできない生徒に対し学校が提供すべきことは様々な「達成体験」である。生徒は数々の体験を通して成長し、自己肯定感を育むという「物語（ストーリー）」があれば、進路のための努力も苦ではなくなり自立した大人に近づくのであつて、高校生段階にこそインターンシップが必要であると話されました。

また、「千と千尋の神隠し」という映画が、インターンシップ体験による主人公の成長というテーマを含んでおり、成功体験により主人公が自信に満ちていく表情の描写が秀逸であるという話も興味深く聴きました。

今回の研修は、非常に有意義な情報を得られる機会となりました。私の子供も現在3年生で、正に「運命の岐路」に直面しております。青森県内をみると、未来への第一歩を踏み出す選択肢が大学

青森県高P連広報紙づくり研修会

「広報紙 より魅力的に・・・」

去る6月27日、青森県総合社会教育センターに105名の参加者を迎え、「広報紙づくり研修会」が開催されました。

まず開会行事として、調査広報委員長挨拶、事務局校であるむつ工業高校蝦名博校長から挨拶をいただき、次いで県高P連千代谷均事務局長から、広報紙コンクールについてお話がありました。選考方法は例年通り「学校と家庭を結ぶ紙面づくり」「見やすく、読

みやすい紙面作り」「学校の現状を十分に伝達する紙面作り」「特集記事など、特色ある紙面づくり」という観点から、総合的に審査が行われるとのことでした。

次に、広報紙コンクールで2年連続、青森県の最優秀受賞受賞の栄誉に輝いた青森中央高校の広報委員会より発表がありました。青森中央高校広報紙「やしゃぶし」は、生徒玄関前にそびえ立ち、学舎を守る守護神として昭和51年に植樹された落葉小高木から名付けられたとのことでした。広報紙は年3回、発行しており、6月発行分は教職員・PTA役員の紹介、12月発行分はPTA活動や学校行事、3月はPTAカレンダーとして、次年度の年間行事をメインとして作成しています。広報委員会のメンバーは11名で、編集会議の際にはさまざまな意見を出し合っておりよい広報紙作成をめざしているとのことでした。

その後、昨年に引き続き東奥日報社編集局整理部長石鉢康範氏から「広報紙より魅力的に・・・」というテーマでご講演をいただきました。

まず広報紙づくりは、報道記事（学校祭、体育祭、PTA総会、部活動の大会報告など）、読みのもの（寄稿文やコラムなど）、

企画・特集もの（PTA活動をめぐるアンケートや進路をめぐる情報提供など）のバランスに配慮すべきことを教わりました。

取材に当たっては、参加した生徒や保護者の声を拾って記事に臨場感を出す、写真は被写体の人物の表情を「一歩踏み出して」撮る。また寄稿の依頼に当たっては、テーマ、書いてもらいたいポイント、文字数・締め切り期日の厳守を伝えることが必要とのことでした。そして、寄稿形式よりも取材形式のほうがより魅力的な紙面になるという指摘をいただきました。寄稿に頼りすぎないように、とのアドバイスが心に残りました。

今回はより魅力的な広報紙づくりについて学ぶことができました。今後の取組みに生かしたいと思えます。

（調査広報委員長 畑中 了）



見出し付けに挑戦中！



教育のプロに囲まれる貴重な体験

七戸高等学校 前PTA会長 三上 義也

7月6日～7日に開催された第66回東北地区高等学校PTA連合会盛岡大会において表彰いただき心より光栄に存じます。これはひとえに、所属しておりました七戸高校PTA会員の皆様、そして青森県高等学校PTA連合会会員の皆様のご協力の賜物と、紙面をお借りして深く感謝申し上げます。振り返るとあつという間でしたが、単Pの活動はもちろんのこと、地区や県、関連するその他の活動など多岐にわたっておりまして。この活動のたびに各地域や学校が大なり小なりの課題を抱えていながらも、子供たちのために前進していることを感じさせられました。

これまでの活動をとおして一番印象に残っていることは、県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会委員を委嘱されたことでした。会議の前に事前資料が配布され、初回は103ページもある分厚い冊子と山のような関連資料でした。そして開催通知には、「一人3分程度で意見を発表していただきます。」との文面が：「うわーっ！どうしよう」と思いい、念のため構成メンバーを確認してみましたら、各市町村の教育

長、小中学校校長会の会長、副会長、商工会議所の副会頭など、教育のプロフェッショナルな方々がずらりと並んでおります。さらにオブザーバーとして各高校の校長が名簿に記載されており、その中には素人の自分が「大丈夫か、俺」と自問しました。それから、毎日少しずつ資料を熟読し、会議に備えるため、蛍光ペンと付箋を使い意見発表での理由づけとなりそうなるところに、しるしを付け理解を深めていきました。学生時代でもこれほど勉強したことはなかったと思うほどでした。おそらく人生で一番勉強したと思います。

こうして準備万端で臨んだ会議でしたが、残念ながらうまく発表できませんでした。頭の中で考えていることが、言葉に出すと相手にうまく伝わりません。人前で話すことの難しさを改めて感じました。それでもなんとか発表を終えることができ、本当に貴重な経験をさせていただきました。

今回の大会をもちまして一つの区切りとなりますが、今後は、PTAを通じて得たものを子ども達のさらなる発展のために尽くし、ひいては社会に還元していきたいと

全国大会発表を経験して

八戸工業高等学校 PTA会長 橋本 修

平成29年8月23日から25日、第67回全国高P連静岡大会が開催されました。大会テーマは「有徳のひとづくり」、サブテーマは「未来のために行動する『一人』を育てよう」でした。全体会は袋井市にあるエコパアリーナで行われ、全国から約1万人の会員が集まりました。当日は36℃を超える暑い中を駅から会場まで歩かれた皆さん、お疲れさまでした。

基調講演は、大河ドラマ「おんな城主直虎」で時代考証をされた小和田哲男氏の「戦国時代に学ぶ子育て」という興味深いお話でした。

私は第1分科会の「学校教育とPTA」の発表者を務め、本校の高谷悟校長、渉外部の志村博先生とともに「チーム八工」として登壇しました。会場のアクトシティ浜松は音楽の街らしくオペラハウスのような会場で、とても緊張しました。

思います。

最後にPTA活動をとおして多くの方々とお会い、ともに過ごせたことに感謝いたします。短い間でしたが本当にありがとうございました。

発表の冒頭で、八戸の生んだ偉人「西有穆山禅師（にありぼくざんぜんじ）」が、15年間住職を務めた袋井市の可睡斎（かすいさい）で地元の教育に尽力されたことなどを紹介し、八戸市と袋井市の意外なつながりについて話しました。

次に、八戸市と本校の魅力について話しました。八戸の三社大祭や種差海岸、B-1で有名な八戸せんべい汁、そして本校の「大運動会」を紹介し、大喝采をいただきました。

本校のPTA活動については、同窓会や学校後援会、ほつみ会（支援団体）そしてPTAのOB会が連携して活動している「新しい協働モデル」を紹介しました。

最後に、三八地区協議会の様子を写真で紹介しました。学校代表で参加している全国大会ですが、たくさんさんの三八地区PTAのみなさんも参加されていましたので、日頃支えてくださっている地区の仲間として、皆さんと何かの形で参加できないかと考え、映像で紹介することになりました。また、発表の様子は9月に行われた三八地区協議会の合同研修会の場で皆さんに紹介しました。

全国大会の魅力は、他の地域のPTAの皆さんと交流できることです。今回発表者の控室で、山梨県立甲府昭和高校の井上耕史校長先生と情報交換ができました。「学校のゆるキャラマスコット」である「トライス君」が、地域おこしに貢献していることを知りました。トライス君のグッズは後日、学校に送っていただき、本校生徒会の役員にお土産として渡しました。山梨県南部町は八戸南部氏の出身地でもあり、時空を超えた交流ができました。

分科会の後は、県高P連の若宮会長、相川元会長、千代谷事務局長をはじめ、三八地区のPTAの皆さん約30名が浜松に集まり、情報交換会を行いました。とても楽しい全国大会の思い出となりました。ありがとうございました。



地区協議会だより

東青地区協議会

東青地区協議会 会長 工藤 正興

平成29年11月24日(金)の午後2時45分より、アップルパレス青森において、東青地区協議会研修会を開催することができました。今回の講演テーマは「こころの健康教育、人間関係づくりの理解のために」というもので、講師には青森大学教授の船木昭夫先生を招き、悪天候ながら100名の参加者がグループワークを取り入れた、ソーシャル・スキルズ・トレーニング等の実践を体験しました。

良好な人間関係づくりをするためには「一人ひとり自尊心を高める」「相手の気持ちに気づく」「互いに肯定的な関わりをする」「自分を尊重したコミュニケーションスキルを学ぶ」「自分の衝動をコントロールする」などの心理教育プログラムが重要になること。その具体的な内容は、ストレスマネジメント、ストレスコーピング、アサーショントレーニング、アンガーマネジメント、ソーシャル・スキルズ・トレーニング(SST)等の実践が必要になることを学びました。

今回の研修会は、船木先生の分かりやすいユーモラスな事例やこれまでの実践報告などから、大変有意義な時間になったと思います。今後は、積極的に自らのスキルアップに励み、学びやトレーニングを継続することが必要であると認識しました。船木先生、ありがとうございました。



中南地区協議会

中南地区協議会 会長 木村 龍悦

今年の「親と子と教師の語る集い」は、8月8日、弘前パークホテルにおいて開催されました。

この集いは、青森県高等学校PTA連合会中南地区の主催で中南地区13校の保護者、生徒、教師が集まり、記念講演の後、2つの会場に分かれて各校の活動や生徒、そして、それぞれの保護者の想いなど、意見交換して交流を深める集いでありました。

今年は、記念講演の講師として、弘前市文化スポーツ振興課、主幹の今関勝氏を迎え、「スポーツから学ぶ成長のための秘訣」と題し、講演をいただきました。今関氏は、元プロ野球選手として日本ハムで投手として活躍し、東北楽天ゴールデンイーグルスでは、ジュニアヘッドコーチとして選手の育成に努めて参りました。その後、弘前市職員として採用され、文化スポーツ振興課主査として弘前市発展のため様々な業務の推進にあたっておられます。加えて小中高生への野球指導や社会人野球チームの監督としてスポーツの発展にご尽力されております。

講演では、人の痛みをわかる人になるためにはスポーツも勉強も大事である。あらゆるスポーツは挨拶が基本であり、挨拶をしつかりし、練習すること。また、野球の采配で監督のサインを間違える選手は数学が弱い子が多いこと。そして、人生は常に目標を持ち、夢に向かって一生懸命進むことが大切であると結ばれ、参加者はスポーツから学ぶことの多さや大切さを深く考えさせられました。

今回の集いを通して、多くの方々と交流ができ、子どもたちの今後の人生の一助となるよう学校と保護者、そして、地域と一体となって取り組んでいくことが最も必要であることを改めて認識しました。



三八地区協議会

三八地区協議会 会長 橋本 修

平成29年5月19日総会において、私、橋本(八戸工業高校PTA会長)が協議会の会長を務めることになりました。総会終了後、情報交換会が行われました。本校渉外部の志村先生の電子笛と八戸工業大学第二高校の大関先生のドラムの共演や、前会長吉岡さんのパフォーマンスなど、三八地区協議会らしい演出で大盛会でした。

6月の県高P連五所川原大会と8月の全国高P連静岡大会において、八戸工業高校がPTAの取組みについて発表しました。

9月8日には合同研修会を実施しました。(株)ビジネスサビスの小山康輝氏を講師に迎え、「本当は怖いSNS」というタイトルで、SNSの実態について説明を受けました。現実には起きた事件の紹介もあり、皆さん真剣にメモをとっていました。午後は完成したばかりの多賀地区多目的運動場(ダイハツスタジアム)や、八戸市立学校西地区給食センターの見学を行いました。なかなか見る機会のない場所だったので、参加された皆さんから大好評でした。

この他にも三八地区協議会では、PTA会員の交流会が自主的に行われていて、楽しく活動しています。



地区協議会だより

西北地区協議会

西北地区協議会 会長 笹森 和樹

西北地区協議会研修会は9月7日(木)にプラザマリユ五所川原にて開催されました。「命を守る防災教育」をテーマに、講師には(有)アップルウェザー社長 工藤淳氏を招き、「家庭での防災教育」に助けられる人から、助ける人へ」と題し講演をいただきました。続いて西北地区協議会研修委員長の棟方博之氏(五工高)より「我が家の約束ごと」家庭で確認したい緊急連絡方法」と題し実践発表がありました。参加者は74名と各校から多くのPTA会員の参加をいただき、講演後の質疑応答では次々と質問が出るなど、参加者の防災に対する関心の高さが伺えました。今回の研修会を通じて、改めて防災に対する意識を高めることができ、有意義な研修会となりました。西北地区健全育成委員会では、地区を9ブロックに分け、各地域で開催された祭りでの巡回活動や朝の挨拶運動が随時実施されました。また、6月9日(金)に開催された県高P連五所川原大会では、開催地区として多くのPTA会員の協力の下、地区一丸となって大会運営にあたり、無事大会を終えることができました。今後も大会のテーマである「手をつなぎ想いをつなぐPTA」が展開されるよう活動の充実に努めて参ります。



上十三地区協議会

上十三地区協議会 会長 竹内 貴之

平成29年10月12日(木)、七戸町中央公民館を会場として健全育成と研修委員会の合同研修会を開催いたしました。この研修会は、青森県消費生活センターの「移動消費生活講座」を活用し、これから社会に出る高校生に対して各家庭で様々な消費者問題に対処できるようになればと計画したものです。

テーマを「家庭で育てる消費者力」子ども

もの新生活に向けて消費者力をアップするためには」として講話をいただき、子供たちが消費者トラブルに合わないよう注意すべき点、万が一の場合に取るべき適切な対処方法を具体的に学ぶ研修内容でした。

また、参加者全員がクイズ方式で消費生活チェックを受け、「消費者の8つの権利と5つの責任」を知り、カシコイ消費者になるためのアドバイスをもらいました。①契約の成立時期、②契約の解除ができるかどうか、③クーリングオフの解説、④インターネットで気をつける事例、⑤青森県であったトラブル事例など具体的事例にそって教えて頂きました。

今回の研修では社会経験が浅い子供たちがトラブルに巻き込まれないためには、保護者自ら正しい知識を身につけることが大切であると感じました。最後に平日の昼からの計画にもかかわらず、全ての学校から多くの参加をいただきましたことに感謝いたします。



下北むつ地区協議会

下北むつ地区協議会 会長 大見 竜人

今年度の下北むつ地区協議会研修会は、昨年9月に下北ジオパークが日本ジオパークに認定されたことを記念して「なかなか行けないジオサイト」と題し普段なかなか訪れることができないジオサイトへ行き研修しました。ジオパークとは、「地球(ジオ)」と「公園(パーク)」とを組み合わせる言葉で、「大地の公園」を意味し、地球(ジオ)を学び、丸ごと楽しむことができる場所を言います。

当日は生憎の雨模様でしたが、むつ下北地区の5校から60人以上の保護者や教職員や生徒が参加し、大型バス2台に分乗し半日かけて研修しました。むつ市からボランティアガイドを派遣してもらい、バスの中でもジオパークについて詳しく説明していただいたのですが、ジオサイトの事がとても分かりやすく、身近な話が多いためにあつという間に時間が過ぎてしまいました。

参加者からは、「とても面白かった。」下北に住んでも来たことが無かった。「ガイドさんの話が面白かった。」などの感想が上がっていました。

今回は半日しか時間が無かった為、限られたジオサイトしか訪れることができなかったのですが、今回の研修で自分が住んでいる地域の事を深く知るきっかけになってくれればと思います。





風に吹かれてく全国無料出張講演の旅

千葉大学大学院医学研究院名誉教授 野田 公俊氏

夏・3つの希望のトレイル

八戸の中心街を通過して岬の灯台を右手に大きくカーブする。車の窓から眼下に雄大な青い海が見えてくる。この海はるかアメリカ大陸の西海岸までつながっている。海岸の砂浜と並行して走る広大な天然芝生が見える。太古から続く珍しい芝生のある風景である。まだ夏のキャンプ場の賑わいも残っている。車の進むこの道は東山魁夷の「道」のモデルになった県道1号線、希望へと続く人気の道である。これに最近誕生した1本の新しい「道」が加わる。「みちのく潮風トレイル」である。三陸復興国立公園内を走る。青森県八戸市から福島県相馬市まで続く全長700kmの道である。海と里と川と森のあいだを巡る希望へのロングトレイルである。

このトレイルが小さな岬を越えると種差海岸から大久喜海岸へと入る。小さな漁港のそばに神社があり真新しい鳥居が立っている。多くのウミネコが営巣してにぎやかである。どこにでもありそうな普通の日本の風景である。この神社の前に先日100名を越える外国人の人たちが集まったそうである。アメリカ合衆国オレゴン州から駆けつけた人たちである。この厳島神社の鳥居にはちよつと不思議な話がある。太平洋を旅したのである。しかも1万4kmの旅を。2011年3月11日、突然大きな津波がこの港を襲う。何もかもが流される。港のそばの神社の2つの鳥居も例外ではなく、あつという間に流失してしまう。

流失から2年後、鳥居の2本の足をつなぐ一番上の屋根のような部分「笠木」が思わぬ場所で見つかる。オレゴン州のニューポート市のフロレーンス市の海岸に2つの笠木が漂着したのである。大久喜海岸から7km離れた太平洋の対岸の町の人々は大切なものに違いはないと思い保管を決める。それがポートランド日本庭園の学芸員の目に留まる。鳥居には寄進者の名

前と家内安全の文字が読み取れたと言う。やがて八戸市の神社のものと判明する。横幅約5m、重さ約200kgのこの笠木の返還プロジェクトがスタートする。奇跡が奇跡を呼び、太平洋を挟んだ2つの国の「海のトレイル」の心の交流が加速する。

ついに日本への返還が実現し、大久喜海岸に戻った笠木の修復がはじまる。2016年5月、東北新幹線の八戸駅に降り立つ多くのオレゴン州の人たち。出迎える八戸の人たち。神社の前で復元した鳥居を祝う式典が行われる。鳥居に名前があつた寄進者の老人も参加している。感激の涙がアメリカの参列者の涙を誘う。厚意と感謝の歓迎すべき連鎖である。

「みちのく潮風トレイル」はさらに南下して岩手県の洋野町に入る。洋野町立の3つの小中学校で無料出張講演を行う。生徒代表の御礼の言葉と大きな花束をいただく。帰りの東北新幹線は混んでいる。隣の席の外国人が私の花束をチラチラと見ている。幸せな香りいっぱいの旅である。

本稿は、今年度第1回単位PTA会長会議において、ご講演をいただきました野田公俊氏が、細菌の世界を知ってもらおうとはじめた「ミクロの世界からのメッセージ」と題する全国無料出張講演が、文部科学大臣表彰受賞となったことについての報文の一部を許可を得て転載したものであります。

野田公俊氏 プロフィール

昭和26年八戸市出身

八戸高校、東北大学、東京大学大学院修了、医学博士

千葉大学大学院医学研究院名誉教授

日本細菌学会元理事長

日本細菌学会理事長時代、「子どもの理科離れ防止の教育講演」を全国的に展開。

この講演活動で平成20年度文部科学大臣表彰「科学技術賞（理解増進部門）」を受賞
また、平成25年に日本細菌学会の最高の賞である「浅川賞」を受賞

校 介 盟 紹

高校生レストラン「キッチンいちよの森」

百石高等学校 教諭 大和 達子

本校の食物調理科は、おいらせ町にある調理師養成施設でもあり、卒業と同時に調理師免許が取得できる学科です。この食物調理科の希望者から構成される家庭クラブ(部活動。部員26名)が、昨年9月、町内の施設をお借りして高校生レストラン「キッチンいちよの森」(月1回土曜日営業)をオープンさせました。学校、行政(おいらせ町)、企業、学校後援会が連携したレストランです。この高校生レストランは、学校で身に付けた知識や技術を活かす研修の場であり、生徒の職業観や勤労観を育み、世代を超えた人々との交流を通して自己有用感を高めさせることを目的としています。また、地域の活性化に貢献することにより、地域に有用な人材育成につながるものと期待しています。

高校生レストランでは、メニュー開発、仕込みから調理、接客、食材管理、後始末までレストラン運営のすべてを生徒達が行います。

提供しているのは「結御膳」。周りの人との縁が結ばれてレストランが実現したこと、人と人を結ぶ料理でありたいということからネーミングされた和定食で価格は1,000円です。また、地産地消と青森県が推進する「だし活」をコンセプトに、季節により4種類のメニューがあります。

生徒達は、高校生レストランのために、日々調理とサービスに励んでいます。特に、目玉であるだし巻き卵は、何度も練習を重ね、営業日には実演もしています。また、サービス担当は、最高のおもてなしを目指し、話し



生徒によるおもてなし

合いながら実技練習を行っています。このような取り組みは、町の広報や雑誌、テレビや新聞等で広く紹介されました。さらに、今年度は農林水産省主催の「第10回地産地消給食等メニューコンテスト」において、「食料産業局長賞」を受賞しました。高校生レストランの活動により、生徒達は確実に知識や技術、おもてなしの心を身に付けています。また、コミュニケーション力や課題解決力などが身に付き、達成感を味わいながら、自信を持つことができたと思います。さらに、地域に貢献する喜びを感じ、これからの地域に貢献したいという思いを強くしています。生徒達を成長させる高校生レストランを今後も継続させ、これからも「地域とともにある学校」を目指していきたいと思っています。

史 幕 歴 に

「金木高校市浦分校の閉校に寄せて」

金木高等学校市浦分校 教頭 白濱 卯

11月4日(土)の閉校式を翌日に控え、その準備に慌ただしく追われながらふと体育館を覗くと、生徒9名が体育館のピアノを丸く囲み相内分校校歌と市浦分校賛歌を練習している光景が目に入り、私はなぜかこみ上げる涙を押さえることができませんでした。老いのせいなのか疲れのせいなのかはわからないのですが、久しぶりに胸が熱くなったのです。

金木高校市浦分校は平成30年3月31日で64年の歴史に幕を閉じます。生徒9名、校長をはじめ教職員9名からなる五所川原市設置による昼間定時制。様々な事情により、今年3月に平成29年度末での閉校が決定しました。

私は最後の分校教頭として、藤澤重信校長とともに閉校事業に携わり、相内分校から続く市浦分校の歴史と分校に対する多くの皆様の「思い」を知ることができました。閉校式を終えた今では、ただただ惜別の思いでいっぱいでありました。また、今回の閉校事業にあたり、御尽力いただいた五所川原市をはじめとする閉校事業に関わった全ての皆様、同窓生、教職員、そして9名の生徒に対して、感謝の言葉しか思いません。

さて、11月4日の閉校式は、多くの来賓、同窓生及び旧職員など150名を超える皆様の出席により、無事に開催することができました。県内外から市浦分校にゆかりのある多くの皆様に出席いただきまして、心からお礼申し上げます。さらに、閉校式に続く「市浦分校の閉校を惜しむ会」にも、80名の皆様の出席をいただき、時間の許す



閉校式で賛歌を歌う

限り閉校を惜しむことができました。特に、来賓挨拶をいただきました青森県高等学校定時制通信制教育振興会長である相馬鋁一氏と旧市浦村長である高松隆三氏による、80歳を超えてなお熱き挨拶には、改めて相内分校からつながる市浦分校の存在意義を確認したところで。

終わりに、生徒会長である竹ヶ原藍花さんの閉校式の挨拶の一節を紹介します。

「最後に、私たちをここまで指導して下さった先生方、分校の歴史を築き上げてきた多くの先輩方、いつでも温かく見守り、協力して下さった地域の皆様。そのすべてに感謝の気持ちでいっぱいです。市浦分校を愛してくださりありがとうございました。これからも、変わらぬ誇りを胸に。」

編 集 後 記

広報紙「つながり」88号は東北大会や全国大会、各委員会主管研修会の記事を中心に構成いたしました。今後少子化に伴い、閉校や統合を余儀なくされる高校が増える中、各地域・各校の子供たちの学校生活の様子や、PTA活動の情報を、本紙を通じて、少しでも多くの保護者の方々に共有して頂けると幸いです。日々PTA活動に尽力して下さる学校関係者の皆様、原稿執筆を快くお引き受けいただきました皆様、誠にありがとうございました。

(調査広報委員長 畑中 了)



平成29年度 上半期事業費支出内訳

平成29年4月1日～平成29年9月30日

◆ 事業費 3,436,325円 (予算額 11,701,000円)

1 学校安全普及充実事業費	600,000円	
(1) 8月8日 助成金支出 (地区協議会 安全教育活動費)		300,000円
(2) 8月29日 助成金支出 (青森県高等学校体育連盟)		100,000円
(3) 8月29日 助成金支出 (青森県高等学校文化連盟)		100,000円
(4) 9月11日 助成金支出 (青森県高P連安全教育活動費)		100,000円
2 共済金等給付事業費	3,319,625円	
(1) 死亡共済金 0件	0円	
(2) 後遺障害共済金 1件	91,000円	
(3) 負傷共済金 405件	3,178,625円	
(4) 香 料 1件	50,000円	
	(前年度 2件)	
3 その他事業費	56,700円	
(1) 7月24日 安全互助会だより49号	56,700円	

◎ 青森県高等学校安全互助会加入生徒数

全日制33,864名 定時制・特別支援学校1,138名 通信制367名 総数 35,369名

全日制 (専攻科を含む) 600円
定時制・特別支援学校 250円
通信制 100円

共済掛金は来年度も同じです。

助成金事業

第38回県高総文祭青少年赤十字部門大会



コンクールでの八戸商業高校

第38回県高総文祭青少年赤十字部門大会が10月28日、八戸工業大学第二高等学校を会場に行われました。県内45校から生徒・顧問が集まり、6地区代表による体験発表、壁新聞コンテスト、救急法実技コンクールの3部門で、日頃の活動の成果を発表しました。また、三八・上北地区の3高校による、地域の子どもたちとの交流や施設訪問に役立つものづくりを体験するコーナーも開かれました。

私たち青少年赤十字部の高文連加盟以来、高総文祭のハイライトは何と言っても救急法実技コンクールです。全国に先駆けて行われたことで、スタート以来高い評価をいただいています。

本コンクールは今年で28回を数え、10校13チームが出場しました。1チーム4～5名で、AEDを用いた一次救命処置、三角巾を用いた包帯法、副木等を用いた固定法の技術を競います。県内6地区で行われる日本赤十字社青森県支部所属の救急法指導員および救急法指導講師による講習会を修了し、

地区代表に選ばれたチームが県大会に進みます。厳しい練習とチームワークが必要で、中にはお揃いのTシャツを決めてくるチームもあり、運動部に似たところがありません。会場に入ると、競技とはいえ、生命の危険に向き合う緊張感の中、傷病者に寄り添い、優しい言葉を掛けながら、てきぱきと処置を施していく姿に、見る者は大きな感動を覚えます。

今大会では、一位八戸商業、二位八戸西、三位八戸東と三八地区代表が上位を独占する結果となりました。出場できる学校が少ない地区が多い中、三八地区は、毎年代表を決めるコンクールを実施するほど救急法への取り組みが盛んで、平成23年から三八地区代表校が一位を獲得し続けています。他地区の奮起を期待しています。

最後に、安全互助会補助事業として、これまでに心肺蘇生法訓練用ダミー人形6体、AEDトレーナー31台を配備できましたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。心肺蘇生法の普及のために、今後とも大切に使わせていただきます。なお、救急法講習会は、県内6地区において、例年6～7月頃2日間の日程で行われています。AEDの使い方を含む心肺蘇生法や応急手当の技術を広めるため、部員に限らず青少年赤十字加盟校の生徒・教職員であればどなたでも参加できますので、多くの方々の参加をお待ちしております。

(高文連青少年赤十字部委員長

安江 道子)